



TITLE:

閉会の辞

AUTHOR(S):

森, 重文

CITATION:

森, 重文. 閉会の辞. 京都大学附置研究所・センターシンポジウム: 京都からの提言-21世紀の日本を考える (第8回) 「科学が見いだす日本の進路」 2014, 8: 109-110

ISSUE DATE:

2014-03-14

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187731>

RIGHT:

閉会の辞

森 重文（京都大学数理解析研究所長・教授）

ただ今ご紹介に預かりました、数理解析研究所の所長・森 重文でございます。本日は、非常にたくさんの方がお集まりくださり、本当にありがとうございます。主催者側の一人ではありますが、私自身、観客として非常に楽しませていただきました。

時間も押しておりますので、あまり詳しくは申し上げませんが、午前中は、温故知新というのでしょうか、田中先生の宇宙の始まり、高井先生の霊長類の進化というので大変なロマンをかきたてられました。正直言いますと、幾つか質問をしたかったのですが、それをする、また時間が延びてしまうので、それは控えておりました。

午後は、鈴木先生が科学を学ぶことの重要性について、お話しくださって、研究者の一人として、まさしく我が意を得たりという感じで伺っておりました。

影山先生のニューロン再生のお話を伺ったときは、60代の私としては非常に嬉しかったです。

小野先生の中性子補足療法ですが、写真の説得力、その背景、さらに大変な効果があるということに非常に驚き、何と言いますか、大輪の花の開花を待つ心境であります。

パネルでは、ゲストパネリストの津田先生が、「数学は終わった学問だ」という言葉を引用なさり、その上で、実は数学が如何に大きなポテンシャルを持っているかということを十分に仰って下さいました。したがって、数学者の私ではありますが、それ以上何も付け加えて申し上げる必要はございません。

常松様は、山中先生のノーベル賞の報道に始まって、基礎と応用の狭間のことを指摘下さいました。そのことにちなんで、基礎の研究者が、絶えず応用を意識する必要があるということで、数学者として、どう答えるかについて一言申し上げます。数学は個々の研究者がというよりは、数学全体として、そういう応用に目を向けるべきだと考えます。その意味で、私は全くの純粋数学の研究者ではありますが、数学全体として、そういう方向に向くことに、賛成して協力したいと思っております。

このパネルの生のやりとりというのは、非常に面白かったです。確か高井先生が、「将来のことを聞かれてもわからない」と、いかにも正直なことをおっしゃって非常に楽しかったです。

最後に、お礼を申し上げておきたいと思います。本シンポジウムは京都大学の附置研究所・センターが主催しておりますが、今回、北海道大学の御協力を賜り、心より感謝致します。また、読売新聞、北海道京大会、さらに北海道教育委員会の御協力が大きな支えになりました。

また、私がこの場で偉そうな顔をして、閉会の辞を申し上げますが、これは京都大学の22の附置研究所・センター、そして、そのスタッフが、陰で走り回って進めてくれたおかげであります。

また、担当は基礎物理学研究所と数理解析研究所で、基礎物理学研究所の九後所長は、あのように立派にコーディネーターを務められましたので、もう一人の担当者である私も、やはり何か申し上げないといけないということで、ここに出て参った次第です。本日は誠にありがとうございました。